

レンジャーによる環境教育プログラムのより一層の充実のために

桜井良（フロリダ大学大学院自然資源・環境学部）

For the Improvement of Environmental Education Programs by National Park Rangers

Ryo SAKURAI

School of Natural Resources and Environment, University of Florida

日米の国立公園を比較した場合、その数、広さ、制度、予算など様々な違いがあるが、その一つが常駐しているレンジャーの数である。レンジャーとは日本では国立公園で自然環境の保護を行う環境省の職員で自然保護官とも呼ばれ、アメリカでは同様の仕事を行う国立公園の職員を指す。アメリカでレンジャーが常勤と非常勤を合わせ約 20,000 人以上¹⁾、ボランティアが約 90,000 人いる一方、我が国ではレンジャーの数は約 260 人で、登録されているボランティアは約 1,800 人と言われる²⁾。国立公園に十分な数のレンジャーがいれば、施設の管理・運営、許認可や予算執行、関係団体との連絡調整といったデスクワーク以外にも、環境教育や調査研究、巡視パトロールなどの野外業務に労力をまわすことができる。

ここでは環境教育の側面に焦点を当てて、米国フロリダ州エバーグレイズ国立公園の事例を紹介したい。陸海合わせ東京都の約 3 倍の 6,000km²を超す広さを誇るエバーグレイズは多様な動植物、そしてマツ林、湿地帯、そして浅瀬など様々な生態系を配し、世界自然遺産にも指定されている。一方、一日 1,000 人が移住してきていると言われているフロリダ州にあり、また大都市マイアミからわずか 80km しか離れていないので都市化の影響を受けやすく、米国で最も存続が危ぶまれている国立公園とも言われている。

公園内には 4 つのビジターセンターがあり、複数名のレンジャーが常駐しているそれぞれのセンターには、4, 5 つの環境教育プログラムが常時用意されている。訪問客からしてみるといつ何時にセンターを訪れようと、常に何かしらのプログラムを楽しむことができるのだ。私が滞在していた 4 日間の間にもそれぞれのビジターセンターにて合計で 7 つのプログラムに参加することができた。ガルフ・コースト・ビジターセンターでの地域に自生する植物のガイドツアー、エバーグレイズに隣接するビッグサイプレス国立自然保護区でのワニの生態に関する視察ツアー（写真 1）、そしてシャークバレービジターセンターでの微生物が生態系に及ぼす役割に関するレクチャーなど、30 分程度レンジャーが担当するプログラムは約 2 時間おきにほぼ毎日行われている。私が参加した時は、それぞれ 10 人程度の訪問客がレンジャーの話に聞き入っていた。また 1 時間半から 2 時間程度のガイドツアーも多数用意されており、ガルフ・コーストでの公園内の島々を遊覧するボートツアー、シャークバレーにて湿原の真ただ中へ散策するバスツアー、そしてフラミンゴ・ビジターセンターでの民族植物学に関するハイキングツアー等は、時間がしっかり確保されている分、中身の濃いツアーになっていた。



写真1 レンジャーによるワニの視察ツアー

中でも圧巻だったのが、アーネスト・コースト・ビジターセンター周辺で行われた2時間半に渡る自転車ツアーである(写真2)。マツ林、ヌマスギ林、そして湿原など3つの生態系をレンジャーと共に回る本ツアーは、参加者には無料で自転車が貸し出され、そしてお土産にエバーグレイズのロゴが入った水筒も渡された。参加費は無料である。熟練のレンジャーが国立公園内の動植物を案内し、地質学的な側面も丁寧に解説する当ツアーは、ハイキングコースを自転車で回ることもあり、エクササイズの要素も併せ持つ。全米各地だけでなく、世界各国から集まった参加者はツアーを存分に楽しんでいる様子であった。



写真2 三つの異なる生態系をレンジャーと回る自転車ツアー

経済恐慌の真ただ中であるにも関わらず、オバマ米政権は 2010 年度の予算として国立公園の維持と運営のために追加で 1 億ドルの資金援助をすることを 2009 年に決定した³⁾。米国では国立公園が国民の財産としていかに重要と認識されているかが分かる。また、レンジャーによる数多くの環境教育プログラムなど、国立公園が一般市民への教育の場としてしっかり確立されているということもよく分かる。米国では一般国民の自然保護意識が我が国のそれと比べ高いと言われるが、国立公園でのレンジャーによる充実した環境教育プログラムを見るとこれは全く不思議ではない。一方、我が国ではもともとレンジャーの数は少なく、業務の多岐化や事務量の増大によってデスクワークに追われているのが現状であり、レンジャー自身による訪問客への教育プログラムの実践は困難である。また、観光客や地元民では、そこが国立公園であるということすら理解していないこともあり、またレンジャーに出会うこともあまりない。我が国は 29 の美しい国立公園を擁するにも関わらず、国民の財産としての認識が薄く、また一般市民への環境教育の実践の場として十分に機能していないことは残念である。国立公園には本物の自然がある。環境教育によって限りのない感動を得ることができ、その感動が国立公園の利用と保護を同時に高めてゆく。我が国でも今一度、国立公園の意義を再認識し、レンジャーの増員も含めそのより効果的な管理・運営のために動き出すべきだろう。

謝辞：本稿の執筆に当たっては、元環境省アクティブレンジャーの前田剛さんよりご助言を頂いたことを記して、感謝申し上げます。

注

- 1) National Park Service, 2010, <http://www.nps.gov/aboutus/workwithus.htm> より入手、最終アクセス日 2010 年 11 月 8 日
- 2) 環境省、2008、国立公園の管理体制、<http://www.env.go.jp/nature/np/pamph5/04.pdf> より入手、最終アクセス日 2010 年 11 月 8 日
- 3) National Park Conservation Association, 2009, National Parks Conservation Association Praises Obama Administration Budget Proposal for National Parks, http://www.npca.org/media_center/press_releases/2009/budget_022709.html より入手、最終アクセス日 2010 年 9 月 12 日。